

上田高等学校

関西同窓会報

第44号

2017年(平成29年)

1月17日(火曜日)

編集発行

上田高等学校関西同窓会

第26回総会・懇親会

六文銭の赤備えシャツで勢ぞろい



上田高等学校関西同窓会の第26回総会・懇親会は、平成28年9月3日(土)、大阪コロナホテルで開催され、会員・来賓の42名が参加しました。午前10時からの総会に引き続く講演会は、和歌山県の歴史がご専門の小山譽城(よしき)先生が「真田父子の高野山追放と幸村の九度山脱出」と題してお話されました。引き続いて行なわれた懇親会は、48期から85期までの参加者が六文銭入り赤色のTシャツを着て写真撮影したのち交流を深めました。

新会長に竹内俊隆さん(68期)

総会は活動報告・次年度活動計画案、会計報告・次年度予算案を承認。また、役員人事では新会長に竹内俊隆さん(68期)の就任が承認されました。(役員・学年幹事については次ページの表をご覧ください)

同窓会会則の改正では、広報委員は「年2回」の会報発刊、文化委員は「年2回」の文化事業を担当する、となっていました。いずれも「年1回以上」に改訂されました。これは、同窓会活動の参加者が少なくなっていることから、参加状況をみて柔軟に対応するためです。

参加された来賓は次のみなさんです。

金子元昭様(本部理事長)・内堀繁利様(学校長)・中村隆幸様(同窓会担当教諭)・原田義則様(関東同窓会副会長)・武村洋治様(中南信支部顧問)

真っ赤なTシャツで盛り上がる

同窓会では土屋広報委員長の発案で、大河ドラマ「真田丸」放映、および大坂夏の陣400年を記念して六文銭入りの真っ赤なTシャツを作製し、揃って記念写真を撮りました。来賓に贈呈、参加者からはワンコイン(500円)の協力金をいただきました。参加者には好評で懇親会の間、このシャツを着た方がほとんどでした。

<新会長に就任して>

故郷を語り、また異業種交流の場に

竹内俊隆

先般 9 月 3 日開催の第 26 回関西同窓会総会で、皆様のご推挽を賜り、伝統ある関西同窓会の会長を拝命いたしました。身に余る大役で重荷につぶされそうですが、皆様方のご指導・ご鞭撻、ご協力を得ながら、何とか職務を全うしたいと思っています。石沢前会長には、長きにわたり同窓会の運営にご尽力をいただき感謝いたします。



竹内新会長（左）と石沢前会長

さて、同窓会の席上でも申し上げましたが、これまでの石沢路線を継承するのが基本方針です。本同窓会もご多分に洩れずですが、長年の課題となっておりますのは、若手会員の勧誘・活動参加です。現役時代は仕事に追われて同窓会活動どころではないという感覚だと思いますが、総会への出席ですら 60 歳代以下はごく少数にとどまっています。これまでも、いろいろ考え、それなりの方策を講じてきたつもりですが、どうも思わしい効果がありません。皆様方のお知恵を拝借したいと思います。同じ高校の同窓生ですので、袴を着ずに故郷を語り、また異業種交流の場にもなるようにできたら良いなと思っています。最後に、皆様方のご指導・ご鞭撻、そしてご協力を再度お願い申し上げます。

上田高等学校関西同窓会 平成 28 年度 役員・幹事

会 長 竹内 俊隆 68 期
副会長 金澤 信男 67 期
幹事長 隅田修一郎 64 期
会計長 荻原 靖 74 期
副会計長 尾崎 忍 76 期
監 事 清水 正博 67 期
顧 問 石沢 誠司 60 期 阿部百合子 62 期
企画委員会 委員長 尾崎 忍 76 期（兼）
隅田修一郎 64 期 金澤信男 67 期（兼）上記役員全員
広報委員会 委員長 土屋 俊夫 83 期 石沢 誠司 60 期（兼）
文化委員会 委員長 武舎 一夫 73 期 隅田修一郎 64 期（兼）
学年幹事

保屋野文男 43 期	小泉 孝雄 49 期	半田 仁志 50 期	翠川 健彦 51 期
大瀧 忠長 52 期	荒井 正自 53 期	清水 克正 54 期	若林 忠之 55 期
大野せきこ 56 期	中嶋 巖 57 期	白井 彰彦 58 期	伊倉 邦人 59 期
山本 努 60 期	森田 尚文 61 期	黒岩 屹 62 期	丸山 文夫 64 期
恩田 隆 65 期	金澤 信男 67 期	知野 武文 68 期	伊藤 秀一 70 期
中村 智子 72 期	武舎 一夫 73 期	荻原 靖 74 期	尾崎 忍 76 期
戸田 有一 79 期	唐沢 佳彦 81 期	土屋 俊夫 83 期	近江 裕之 85 期
高橋 路子 88 期	和田 葉子 104 期		

平成27年度活動報告（平成27年9月1日～28年8月31日）

平成27年

▲9月5日（土）第25回関西同窓会総会・懇親会を開催 会員41名・来賓6名（大阪コロナホテル）講演会「大坂の陣と真田丸」講師：大坂城天守閣主任学芸員 跡部 信先生

▲9月17日（木）母校1年生対象社会講座への協力 工学 内海 裕一さん(75期) 理学 松原 隆彦さん(83期)

▲10月3日（土）上田高校同窓会会員大会に石沢会長が出席。出席者330名

▲11月14日（土）中南信支部第22回総会に武舎文化委員長が出席。出席者48名

▲10月31日（土）文化交流会 参加者18名『大坂の陣400年・真田丸関連史跡めぐり』

平成28年

▲1月17日（日）関西同窓会報第42号発行。会報を電子化しメールのある会員にはPDFフ

ァイルを送信。紙の会報を希望する会員にはコピーを送付。

▲1月30日（土）第1回役員会。出席者6名。

▲3月6日（日）第9回文化サロンを実施 参加者：16名。会場：ホテルアウリーナ大阪 206号室 テーマ：「骨董よもやま噺ー本物と贋物の見分け方ー」講師：高橋一博氏 古美術 彩美堂当主

▲6月4日（土）第2回役員会。出席者7名。

▲6月25日（土）関東同窓会第55回総会に武舎文化委員長が出席 出席者242名。

▲7月7日（木）長野支部 七夕会にて石沢会長が講演。テーマ「七夕の起源と歴史」

▲7月17日（日）関西同窓会報第43号発行。発行部数は500部、関西同窓会会員450部、事務局用50部。本部・関東同窓会・北海道同窓会・各支部へはPDFファイルを送付

平成28年度活動計画（平成28年9月1日～29年8月31日）

◆平成28年9月3日（土）に第26回総会・懇親会を開催。会場：大阪コロナホテル

総会：2階215号室 懇親会：200D号室
講演 「真田父子の高野山追放と幸村の九度山脱出」 講師 和歌山信愛女子短期大学非常勤講師 小山譽城先生

◆広報委員会編集による関西同窓会報を年2回（1月17日、7月17日）発行する。1月号については、PDFファイルを作成し、メールのある会員に送付する。紙の会報を希望する会員にはコピーした会報を送付する。（土屋広報委員長、石沢顧問）

◆文化委員会主催による文化事業を年2回開催し、会員相互の交流を促進する。

◇秋の文化交流会 10月29日（土）9:50 南海九度山駅改札出口前集合

「真田昌幸・幸村蟄居の地、九度山の真田関連史跡見学」（武舎文化長委員企画）

◇第10回文化サロン 平成29年2月12日（日）13:00-16:00（阿部顧問企画）

テーマ「纏向（まきむく）遺跡の絹が語る古代日本の養蚕」 講師 中澤隆先生（奈良女子大学理学部化学生命環境学科化学コース教授）

会場 ホテルアウリーナ大阪 206号室

◆上田高校同窓会本部会員大会をはじめ、関東同窓会総会、中南信支部総会などに代表が出席し、交流を深める。

◆母校社会講座への協力 本年度は派遣なし。

◆FACEBOOKなどのIT技術により会員交流の場づくりの拡充を行う。（土屋広報委員長、他）

◆上田高等学校の生徒が文化・スポーツなどの分野において、近畿地区で活躍する場合は応援する。

平成27年度 会計報告（単位:円）

収支計算書(平成27年8月30日～平成28年8月29日)			
収入の部		支出の部	
前期繰越	268,302	総会費用	267,742
総会費収入	269,000	会報費	281,859
年会費	208,000	通信費	0
特別年会費	10,000	渉外費	104,810
雑収入	160,000	事務費	8,328
利息収入	36	雑費	11,728
会報電子化対策費本部負担金	100,000	予備費	0
次期総会参加費前納金	106,000	次期総会参加費繰越分	106,000
		次期繰越	340,871
合計	1,121,338	合計	1,121,338

慶長5年（1600）9月。真田昌幸・幸村（信繁）父子は、中山道を関ヶ原に向かう徳川秀忠軍3万8千を上田城で引き止めることに成功したため（第二次上田合戦）、秀忠軍は関ヶ原合戦に間に合わなかった。激怒した徳川家康は合戦後、真田父子を死罪にしようとしたが、徳川方についた真田信之が、徳川重臣の本多正信や舅の本多忠勝にすがって必死の助命嘆願をしたため死罪を免れ高野山へ追放となりました。



なぜ高野山へ追放されたのか

なぜ高野山へ追放されたのでしょうか。弘法大師空海によって開かれた高野山は奥の院の手前の橋を渡ると、カメラ撮影が禁止されています。これは奥の院地下の石窟に大師が生きたまま座禅を続けておられる（入定留身）という信仰があるためです。ここはお大師さんが今も座禅を続ける聖地なのです。

このため、奥の院の近くに分骨を納めておくと、弘法大師に看とられながら安らぎを保つことができる信じられ、多くの方がここにお墓をつくるようになりました。また、高野山は保元・平治の乱以降、政争で敗れた者が余生を仏道修行に過ごすことを前提としての隠遁場所として知られていました。幸村と同時代には、北条氏直が秀吉の小田原攻めにより降伏しますが、家康の娘婿であったため助かり高野山へ蟄居となっています。

高野山へ追放が決まった慶長5年の12月13日、昌幸は正妻（山之手殿）を連れて行かず側室を連れて行きました。幸村は妻子を同行しました。随従した家臣は池田長門、原出羽、高梨内記ら16名で、ほかに妻子を連れて行ったため、侍女や小者らも含めて総勢は80～100名くらいと推察されます。

一行は高野山の手前の細川というところで女性を泊めました。高野山は女人禁制だからです。昌幸・幸村は高野山の蓮華定院に行きました。この寺は信州の佐久郡と小県郡を縄張りしている寺です。佐久と小県の人たちが高野山へお参りにくるときの宿坊になっており、また真田家の旦那寺でした。しかし、高野山の冬は寒いので、その後、蓮華定院の配慮により、麓の九度山に屋敷をかまえてここに移りました。

九度山での生活

九度山の真田庵（善名称院）はその屋敷跡といわれています。しかし実際は、真田庵から東へ行くと遍照寺（へんじょうじ）という寺がありますが、そこまでの間の200m余に昌幸や幸村と真田家臣の屋敷があったと推測できます。「先公実録」（『九度山町史』）には、「房州様（昌幸）御宅跡を道場海東（垣内）と申し候、左衛門様（幸村）御屋敷を堂海東（垣内）と申し候」とあり、具体的な地名が書かれています。



遍照寺

九度山での生活は上田の真田信之からの仕送りに頼りました。また、和歌山藩からは毎年50石の援助がありました。しかし生活は苦しかったようで窮状を示す昌幸の手紙も残っています。

日常の行動は比較的自由だったようで、「先公実録」には「九度山の浦ノ川渚上下五丁（約 550 m）の間は、房州様（昌幸）左衛門様（幸村）御遊山の所にして、之に依り今に至るも真田渚と唱」と、浦ノ川の渚の上下五丁はよく出かけたので真田渚と呼ばれていました。

また、「九度山御在居の間、時々和歌山中ノ棚（店）の次郎右衛門と申す者の方へ御入成られ候」とあり、昌幸は九度山から約十里離れた和歌山城下の中ノ棚という魚市場の次郎右衛門の所に時々遊びに行っています。

幸村は九度山で昌幸から「豊臣方が決起すれば私が総大将として迎えられるであろう。その時いかに戦うか」について話を聞かされていたし、弓や鉄砲の練習もしていたとされています。これらの事が、後に大坂城に入ったとき、生かされたのではないのでしょうか。昌幸は慶長 16 年 6 月 4 日に逝去します。

九度山脱出

昌幸の死から 3 年後の慶長 19 年（1614）、幸村は豊臣方から黄金 200 枚、銀 30 貫の手付金で迎えられた時、すぐに応じる返事をします。そして自分の屋敷に仮小屋を建て、まわりの農民を集めて世話になったからと言って酒盛りをやり、皆が寝たすきに馬にのり、九度山を出たと言われています。しかし、この話はおかしい。皆が寝たすきに大勢が脱出すれば分からないはずがありません。別の史料では、実は皆に世話になったが豊臣方から誘いを受けたので行こうと思う。しかし皆に迷惑がかかったら悪いから、この地を去り難いと複雑な心情を吐露した。そのとき農民らから「それなら、自分の息子も甥も連れて行ってほしい」と言われ、その場で 40 人ほど集まったそうです。この史料のほうの実情に近いと思います。

幸村は地元の人と交流していて人間関係ができていた。だから地元からも幸村と一緒にいった人がたくさんいるのです。地元の家には、幸村からもらった馬具のあぶみとか蒔絵の弁当箱、手水鉢などが残されています。そもそも監視を頼まれた和歌山藩の浅野氏が真田に同情的でした。

幸村の九度山脱出は慶長 19 年の 10 月 9 日とされています。船を使って紀の川の対岸の橋本に渡り紀見峠をこえて河内に入ったとされています。また、その西側の蔵王峠を越えたのではないかとの説もあります。

大坂城入城

九度山脱出以後について簡単に述べます。10 月 10 日、幸村は息子の次郎右衛門らとともに大坂城に入ります。そこで幸村は一軍の将になります。真田丸はおそらく一か月ぐらいで造り、大坂城の弱点であった総堀の南を強化しました。真田丸はこれまで三日月の半円形だといわれてきましたが、実態がすこしずつ分かってきて、東西 240 メートル、南北 280 メートルのかなり大きな方形だといわれています。堀をほって柵を 2 階建てに作り屋根も作っているので火縄も濡れない。2 階は板敷にして自由に走り回る。そして敵をひきつけて攻撃しました。大坂冬の陣の 12 月 4 日の戦いでは徳川方に甚大な被害が出ました。これで幸村の名声は一段と上がりました。

翌慶長 20 年（1614）の夏の陣では、堀を埋め立てられて裸城になった大坂城から出て戦いました。5 月 6 日の戦いで幸村は藤井寺まで出て伊達政宗とわたりあい、一旦伊達軍を押し戻して、引き返しました。翌 5 月 7 日、茶臼山に陣を敷き、南の家康本隊と戦って家康にもう一步のところまで迫ったが、反撃にあい届かなかった。茶臼山ちかくの安居神社に戻ってきたとき、松平忠直隊家来の西尾宗次に発見され討たれて死にました。その勇猛果敢な奮闘は敵方をも感動させ、またその話を伝え聞いた多くの人々に感銘を与え、真田日本（ひのもと）一の兵（つわもの）と称賛されました。

学校は元気です

上田高等学校長 内堀繁利



あけましておめでとうございます。

日頃からご支援を賜り、厚く御礼を申し上げます。今年もどうぞよろしく願いいたします。

昨年9月3日(土)の関西同窓会総会に、同窓会担当の中村教諭とお邪魔をしました。受付で頂いた六文銭入りの赤いTシャツを着て全員で撮影した「真田の赤備え」ばりの写真がきっと本会報に載っているはずで、それも含めて実に楽しい会でした。お世話になりました。

昨年1月から始まった大河ドラマ『真田丸』がついに終了し、楽しみが1つ減ってしまったなあと思いつつ新年を迎えています。振り返れば、『真田丸』関連だけをとっても、慌ただしい1年でした。1月2日、春風亭昇太さん・小池栄子さんがMCをつとめるNHK『50ボイス』と『ブラタモリ×鶴瓶の家族に乾杯「真田丸スペシャル」』という2つの番組を皮切りに、9日には草刈正雄さん出演の『もうすぐ真田丸』、10日の初回『真田丸』では最後の「真田丸紀行」で、本校や古城の門・校歌を取り上げてもらうところから始まり、その後も様々なテレビや新聞、雑誌などに頻繁に登場しました。また、平日休日問わず古城の門を訪れ写真を撮る観光客もたくさんいて、「上田高校」の知名度はこの1年で一気に全国級になったのではないかと思います。

本校は、こういった「他力本願」だけでなく、SGH(スーパーグローバルハイスクール)を「起爆剤」として、新しい時代を創造する若者を輩出すべく、課題探究・プレゼンテーション、県内外・海外フィールドワーク、佐久総合病院・台湾国立苗栗高級中学・東京外国語大学との連携協定締結、多数の海外高校生・大学生等の受入れと交流、授業への主体的・対話的で深い学びの導入等々、先進的かつ実質的な取組を行っています。初めて実施した2学年台湾研修旅行については、この会報で詳細な報告があると聞いていますが、いま学校も生徒もとても元気です。

関西同窓会の皆さんには、引き続きあたたかいご支援を賜りますようお願い申し上げます、挨拶いたします。

台湾研修旅行

4泊5日、盛りだくさんの内容で充実

2学年 高野 芙美

11月29日～12月3日まで2学年は4泊5日の日程で台湾研修旅行へ行ってきました。海外への研修旅行は上田高校の歴史上初めての実施となります。成田空港と羽田空港に4クラスずつ分かれ、台湾へと出発しました。2日目は2クラス毎に4つの国立高級中学校を訪問し、現地の高校生とグローバル課題について意見交換をしました。3日目は課題研究テーマ別研修、そして4日目は現地の大学生ガイドと一緒に台北市内を自由に散策するB&Sプログラムと、盛りだくさんの内容で研修を行いました。

事前に交流を重ねて準備

116期生は、昨年より上田高校を訪れた多くの台湾の高校生と交流を深めてきました。また、9月～11月にかけて訪問相手校にビデオレターを送ったり、スカイプ交流で事前に交流を重ね、訪問に向けての準備をしてきました。研修の目的のひとつに「台湾の歴史・文化を学びアジア諸国と共有できるグローバルな課題を発見し、探究する」を掲げ、台湾・日本の高校生が共通の課題についてプレゼンテーションをし、お互いの意見を交換する体験もしました。当日は思いもよらぬハプニングや予想外の出来事もありましたが、生徒たちの臨機応変に対応する姿は、さすが上田高校生だなあと頼もしく感じました。もっと話し合いをしたかったと意欲的な感想も聞かれました。生徒たちは、



台北101をバックに

訪問先で熱烈な歓迎を受け、多くの生徒が現地の高校生との交流を通じて台湾の学生たちの積極さ英語力の高さに刺激を受けたようです。また、ディスカッションを通じてお互いがどのように自分たちの国のことを見ているかを知ることができたとの感想も聞かれました。

大学や病院、台湾進出の日本企業も訪問



龍山寺で

3日目の課題別コース研修では、大学や病院、台湾に進出している日本企業、そして名所旧跡や台湾の自然を肌で感じられる様々な場所を訪問しました。多くの方々のご尽力により、今回の研修旅行では個人旅行ではきっと訪問できないような場所で生徒たちは貴重な経験をさせていただきました。

4日目のB&Sプログラムでは、6人ほどのグループに分かれて台北市内を地元の大学生に案内してもらいました。台湾ならではの味や文化、そして人々の生活の様子を間

近に感じながら、クラスの仲間と楽しい時間を過ごしました。夕食会場に戻ってきた際には、どのグループも記念写真を取りながら、大学生の方との別れを惜しんでいました。

『形のないお土産』を得て帰国

自国では当たり前だと思っていたことが通じなかったり、人生で初めての味に出会ったり、ちょっと「ひやっ」とする体験をするなど、「非日常の体験」をする中で、別の自分を見出すことが海外研修の醍醐味ではないでしょうか。今回の海外研修旅行では、多くの生徒が『形のないお土産』を得て帰国してくれたことと思います。台湾のみなさんの優しさを肌で感じ、今まで知らなかった自分の性格や可能性、そして海を越えた高校生との交流で芽生えた友情など、今回の研修旅行を通じて様々な「ものさし」が生徒ひとり一人の中にできたのなら嬉しく思います。

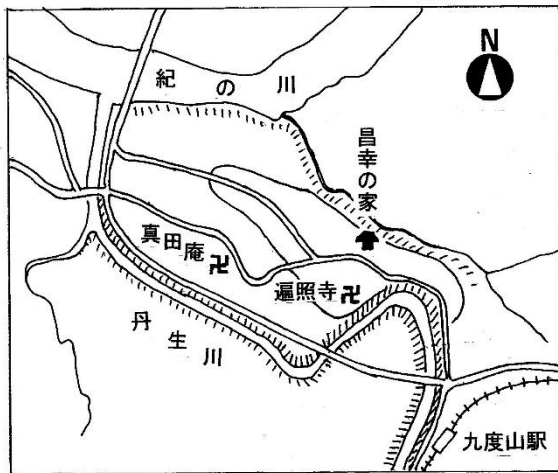
九度山に真田一族を訪ねて

58期 土屋 博

秋酩（たけなわ）の10月29日（土）、南海高野線九度山駅に、48期の関口さんを筆頭に赤備えの六文銭Tシャツを纏った数名を交えて男女15名が集合。ふるさと上田の誇り真田一族の歴史を感じようと、地元のボランティアガイド・中川明さんの案内で小さな山里に点在する真田氏に縁（ゆかり）の史跡を巡りました。中川さんは九度山町まちなか語り部の会の会長で、今日は我々が上田高校の卒業生ということで会長自らがお出ましいただき特別に案内いただきました。

九度山は慶長5年（1600）12月、関ヶ原の戦いで徳川方に敗れた西軍の真田一族が高野山に追放された後、大坂夏の陣までの14年間、無念な蟄居生活を余儀なくされた所です。随従した16名の家臣や妻子、侍女・小者（数名の側室まで！）を含め総勢80名～100名。真田父子らが住んだのは、丹生（にう）川が蛇行して紀の川に流れ込む河口の東側の高台（地図参照）で、ここはもともと地形的にも住むのに適した所で、村の庄屋などの住居が集まっていたそうです。

昌幸と幸村の住居跡を見る



九度山駅から丹生川の蛇行地点の橋を二つ渡ると、ガイドさんはいきなり地図にない右手の細い坂道を登りだしました。しばらく登った所に遍照寺がありました。この寺の隣りに地元の民家を借りた幸村（信繁）の家があったそうです。地形的には南に面した傾斜地の小高い台地の上で、北からの風も弱く正面からの日当たりもよく気候は温暖で比較的過ごし易かった様です。現在の民家には幸村一家が使用したという真田井戸があり堀越しに見えました。

さらに進むと町のメインルートに出ます。ガイドさんは、今度はその道を横切り、また地図にない狭い道を案内します。すると高台の北側に出ました。展望がさらにより今度は紀の川が一望に見えます。一番景色のよい地点で、ガイドさんは後ろを振り向き「昌幸の家はここでした」と言って、民家を指しました。当時、そこは庄屋をしていた家で昌幸に家を貸していたのだそうです。昌幸は9年後の慶長19年（1609）に病死するまで「何とかもう一度上田に帰りたい、と自宅から毎日、北東に見える金剛山を眺め、その延長線上遙か遠くにある故郷上田に向かって思いを馳せていたのでは…」とガイドさん。幸村の家から徒歩5分。真田父子はスープの冷めない距離で借家の民家に住んでいました。家臣の借家もこの近くに集中していたそうです。

真田庵は昌幸・幸村の屋敷跡では無かった

再びメインストリートに戻り、今度は反対側にある空き地の駐車場から下を見ると、町の南側が一望できます。「あれが真田庵です」、ガイドさんが指さす低地に善名称院（真田庵）が見えました。「庄屋はじめ主だった人々は、この高台に住んでいました。大名だった真田父子や家臣もこの高台に



真田庵入口

住んだのです」。ということは真田庵とは何？ 真田庵に着くとガイドさんが、この寺の意外な事実を明らかにしてくれました。

ガイドブックなどによれば、善名称院が昌幸・幸村の屋敷跡とされているが、この寺が建立されたのは幸村が大坂夏の陣で死んでから何と130年後の1714年で、8代将軍吉宗の時、厄封じの為に建てられたのだそうです。境内に真田父子と孫の大助の御霊



真田地主大権現前で

を祀る真田地主大権現があるのは、徳川家はその霊を権現として祀り封じ込めるためとのこと。しかし江戸時代から真田人気の高まりにより、善名称院は真田庵と呼ばれるようになり、却って真田父子の聖地になってしまったのです。

九度山の歴史をかいま見る



「そば処幸村庵」でおいしい蕎麦をいただく

その後、大河ドラマに併せてオープンした「九度山・真田ミュージアム」を見学したのち、古民家を改装した「そば処幸村庵」で、おいしい蕎麦をいただきました。午後は、世界遺産の女人高野・慈尊院まで足をのぼし、高野山の麓にあって山上の寺院を支える役目を果たした九度山の歴史をかいま見ることができました。午前、午後合わせて狭い路地の曲がりくねった通りや坂道、慈尊院の109段の石段など、3キロ程歩きました

が、平均年齢の高い参加メンバー全員疲れも見せず熱心に見て廻り、満足出来た楽しい秋の交流会でした。

ガイドさんからは、真田父子に関するいろんなエピソードも伺いました。日常の行動は、監視役の浅野家がかなり真田に同情的であった為、あちこち出かけたり、幸村が戦に関われない不甲斐なさを嘆きながらも側室との間に9人(?)もの子供を誕生させたこと、など案外自由で穏やかな日々であった事もうかがえて興味深かったです。また、幸村が九度山を脱出した直後、後の咎めを恐れていち早く徳川方に通報した屋敷主は処分されることなく、その後、近隣集落をまとめる庄屋に取立てられ代々続いたそうです。

今回は、我々が真田に縁の深い上田高校卒業生である事で特別に案内をして頂き詳しく説明して貰えて、昌幸・幸村達の生活の息吹を身近で感じる事が出来て嬉しかったです。ガイドの中川さん、ありがとうございました。その後のNHK大河ドラマも九度山を見学したおかげで展開をじっくりと愉しんで観ました。文化交流会を企画して頂いた武舎さんをはじめ文化委員会の方々有り難うございました。

県歌“信濃の国”に真田幸村が登場しないわけ

48期 関口 貞雄

長野県出身者なら誰もが知っていて、県人会・同窓会等で合唱される“信濃の国”には真田幸村は登場しない。何か奇異に感じ、この歌の作られた背景と動機を調べると、意外なことが判ってきた。まず、信濃の国の歌詞1番と5番を見ていただこう。

- 1 信濃の国は十州に 境連なる国にして
 聳ゆる山はいや高く 流れる川はいや遠し
 松本 伊那 佐久 善光寺 四つの平は肥沃の地
 海こそなけれ物さわに 万足らわぬ事ぞなき

- 5 旭將軍義仲も 仁科の五郎信盛も
 春台太宰先生も 象山佐久間先生も
 皆此国の人にして 文武の誉たぐいなく
 山と聳えて世に仰ぎ 川と流れて名は尽ず

5番歌詞に登場する4人の偉人を検証する

5番が信濃の国の偉人を紹介しているが、この歌詞に登場する4人の郷土の偉人を検証すると、今日の感覚では旭將軍義仲と佐久間象山は肯定出来るが、仁科五郎信盛(武田家家臣、高遠城主)、太宰春台(江戸中期の地理、経済学者)は多くの信州人には馴染みが薄く、あまり知られていない。

これにはこの歌の作られた明治32年(1899)の長野県政が大きく影響していた。明治4年(1871)の廃藩置県令により、信州は各藩が衣替えした計14県が出現した。小藩、天領、旗本領と入り混じった新しい県は地域共同体の形をなさなかったため、同年11月、第一次府県統合令で善光寺門前町の長野県と、松本城のある松本を中核とした筑摩県の2県に統一された。更に明治9年(1876)8月、両者を統一して長野県となった。しかし、県庁が善光寺のある長野に決まると、交通が不便で南信、中信から長野への出張に時間がかかり、翌年から早くも分県論が起った。それが明治22年(1889)-24年(1891)には大規模な分県運動に発展していった。

信濃教育会の小学唱歌として誕生し、のち県歌に

明治19年(1886)4月、文部省により任命され長野師範学校校長として赴任した浅岡一は、分裂状態にあった長野県が一つの県としての機能を果たすために、信濃教育会を立ち上げた。明治31年(1898)この信濃教育会が小学唱歌を作る目的で、長野師範学校教授の浅井列に作詞を依頼して誕生したのが後に長野県歌となる“信濃の国”である。

作曲は同学校の依田弁之助が担当したが、雅楽調であったためか愛唱されず、翌年病気の依田に替って赴任した北村季晴によって作曲し直された。この曲が長野師範学校女子寮の生徒に愛唱されて世に出たもので、やがて県民の間に普及し、県民の一体感に貢献するようになった。

このように最初から明確な目的を持って作られた歌詞なので、信州の地理、歴史、産業を歌い郷土の偉人4人をとりあげているが、北信の佐久間象山以外は全て南信の出身者または関係者で占められていて、ここには明らかに分県論に対する懐柔策があったと思われる。因みに分県論の出なかった東信からは一人も登場していない。

現代なら真田幸村・恩田木工・小林一茶・赤松小三郎

現在の視点からは仁科の代わりに真田幸村、太宰の代わりに恩田木工(松代藩家老、財政を立て直し、「日暮硯」を書く)、小林一茶(俳人)、赤松小三郎(上田藩士、英国海軍、議会政治の紹介者)等が入って来なければならない。

真田幸村に関しては、明治 32 年(1899)の時点では今日程全国的なヒーローではなかった事情もある。甲斐、甲府生まれで上野、岩櫃城で育った幸村は、多くの長野県民から見たらあくまでも他国者でしかなかったのである。勿論大阪では豊臣家の恩義を忘れず、大阪の陣に馳せ参じて散った義心厚い武将のイメージがあったが、江戸は徳川幕府のお膝元なのでアンチ徳川はご法度で、江戸時代には講談の一部にとりあげられた程度であった。



真田幸村像 (三光神社境内)

“信濃の国”ができて後、幸村は立川文庫で有名になった

明治 44 年(1911)、大阪の出版社・立川文明堂が江戸時代から伝わる講談、戦記、史伝を集め、文庫本にまとめて出版し、ベスト・セラーとなった。最初は地元の豊臣秀吉の出世物語「木下藤吉郎」「羽柴筑前守」と共に「知謀 真田幸村」が出版されたが、好評だったので続いて「真田十勇士」、更に「猿飛佐助」「霧隠才蔵」等の架空の忍者物語がヒットし、「大阪城冬之陣」「大阪城夏之陣」と出版され、真田幸村は全国的なヒーローとなった。

長野県歌「信濃の国」がもう少し後で作られるか、立川文庫が早く出版されたならば、作詞者は真田幸村を無視出来ず、歌詞に登場させたことであろう。(平成 28 年 9 月 20 日記)

※この文章は関西同窓会フェイスブックに掲載の関口貞雄さん執筆「上田中学、高校校歌等に歌われた上田城と真田幸村」からの抜粋です。全文はフェイスブックをご覧ください。

山極勝三郎の映画「うさぎ追いし」全国封切り開始

昨年 11 月 5 日(土)より地元の上田市・長野市などで先行公開されていた映画「うさぎ追いし」が 12 月 17 日(土)から東京有楽町スバル座ほかで全国封切りとなりました。

「うさぎ追いし」は、大正時代の初期に世界で初めて人工的なガンの発生実験を成功させノーベル医学生理学賞候補にもなった上田出身の山極勝三郎の生涯を、大河ドラマ「真田丸」の上杉景勝役で好演した遠藤憲一主演で描いた人間ドラマです。

全体の約 80%を上田で撮影しており、懐かしの建物や、風景もあると思います。あるいはエキストラで知り合いが出ているかも。

関西では新年 1 月 7 日から大阪梅田のテアトル梅田で上映される予定です。(これは年

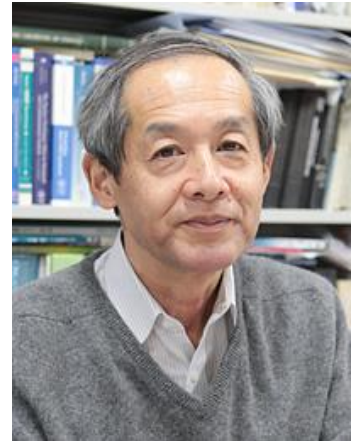
末時点での情報ですので、ネットなどで上映日時を確認してからお出かけください)。映画を見て故郷の偉人を偲んでみては如何でしょうか。

本号はワードで編集しました

この会報はパソコンのワードで編集されています。近年、関西同窓会および本部同窓会の会費収入が減少しています。関西同窓会では 1 月発行号について本部から受けていた会報電子化対策費(10 万円)を自主返上し、編集部がレイアウトを行なうことにしました。いわば素人の編集ですが、ご了承をお願いいたします。(石沢誠司)

「纏向(まきむく)遺跡の絹が語る古代日本の養蚕」

上田高校関西同窓会の皆様におかれましては、ご清祥のこととお慶び申し上げます。文化サロンも、皆様方のご協力により10回目を迎えます。今回は「纏向(まきむく)遺跡の絹が語る古代日本の養蚕」と題して、奈良女子大学理学部化学生命環境学科化学コース教授中澤 隆先生にご講演をお願いしました。古代のタンパク質のプロテオミクス(タンパク質考古学)がご専門で、遺跡からの出土品や文化財に含まれるタンパク質の分析により、素材や原料生物の特定を行い、その結果をもとに、古代の歴史、文化、技術について研究を行なっています。特に上田は古くから養蚕の盛んな地域でしたので、興味あるお話が伺えるものと思います。日曜の昼さがり、皆様お誘い合わせの上ご参加くださいますようご案内致します。



中澤 隆 先生

[日時] 2017年2月12日(日) 午後1時~4時

[場所] ホテルアウイーナ大阪 206号室

〒543-0031 大阪市天王寺区石ヶ辻町19番12号 TEL.06-6772-1441

近鉄上本町駅から14番出口、徒歩3分

[内容]

テーマ 「纏向(まきむく)遺跡の絹が語る古代日本の養蚕」

時間 午後1時~3時(途中休憩) 話題提供 午後3時~4時 自由討論と懇親

講師 奈良女子大学理学部化学生命環境学科化学コース教授 中澤 隆 先生

略歴 1982年大阪大学理学部化学科卒業、大阪大学大学院理学研究科有機化学修了

1984年奈良女子大学理学部助手、講師、助教授をへて、2008年奈良女子大学理学部教授

[会費] 1,000円(会場費とコーヒー代を含む。当日頂きます)

[会場の定員] 25名(申込み順)

[申込み先] 〒635-0013 大和高田市昭和町8-11-226 武舎一夫

e-mail: pretrejean@nifty.com FAX: 078-583-5775(隅田幹事長宅)

2月4日(土)までに上記宛に郵送、メール、FAXの何れかでお申し込みください。



纏向遺跡とは

纏向(まきむく)遺跡は奈良県桜井市北部に展開する遺跡で、3世紀から4世紀にかけて栄え、南北約1.5km、東西約2.0kmに広がる大規模な遺跡。

大量の外来系土器やベニバナ花粉・巾着型の絹布製品が出土している。また、この遺跡の中にある箸墓古墳は、魏志倭人伝に記載のある卑弥呼の墓であるという説もある。